

## 【講評】

今年で15回目を迎えた学生小論文は、全国の大学生・大学院生から、若く自由な発想にもとづく7編の応募があった。その内容は、海ごみ、洋上風力発電、海業やMDA、潜水調査技術など幅広いトピックを議論しており、学生諸君の旺盛な知的関心とそれに対応しが海洋政策の多様性を反映した応募内容であった。

学術委員長が指名した専門家の委員5名および常設委員長5名の計10名の委員により、氏名・所属等を伏せた厳正な審査を行った結果、今年是最優秀賞2名、優秀賞1名が選定された。最優秀賞の白申逸（はくしんいつ）さんの提言「沖合海域を利活用する～浮体式洋上風力発電と沖合養殖の連携の可能性～」は、水産庁および経済産業省の政策文書をレビューしたうえで、近年その成長に期待が寄せられている沖合養殖業と洋上風力発電について、ハイブリッドシステムの研究開発を提言している。水産業とエネルギー産業という分野を横断した内容を具体的に提言した点が特に高く評価された。

もう一つの最優秀賞は、天野翔二郎（あまのしょうじろう）さんである。「日本の海洋状況把握（MDA）の能力強化に向けた政策提言」というタイトルの下、天野さんは海洋空間の総合的管理に向け、海しる、国土数値情報、世界保護地域データベースやGlobal Fishing Watchなど、国内外のMDAの基礎技術の状況を踏まえたうえで、我が国における空間情報の限界や今後の活用の方向性がバランスよく提言されており、高く評価された。

以上2名は大学院生であったが、今年度の優秀賞は、学部生が受賞した。森中聖喜（もりなか まさき）さんによる「尖閣諸島周辺の警備にあたる巡視船の整備環境改善に向けた提言」では、近年負担が急激に増大している海上保安庁による巡視活動について、独自の着眼点に基づいた提言をおこなった。問題点の分析と提言の双方が具体的でクリアーであり、学部生の作とは思えない秀作であると高く評価された。

日本海洋政策学会は、我が国の11府省が担当している実に幅広い海洋関連政策のすべてを分析対象とし、その学際的かつ総合的な学術研究の推進及び進化を目的とした学会である。その多様性は、毎年内閣府総合海洋政策推進事務局が発表している海洋レポート（年次報告）を見ればより具体的にイメージできるだろう。来年度も、多くの若い学生諸君に幅広い海洋政策に関心を持ってもらい、海洋立国にむけた自由なアイデアを提言してもらえることを祈っている。